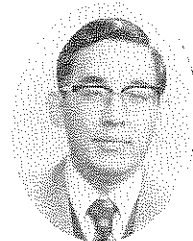


## PREFACE

## 「表面物性とセンサ」特集号発刊に当たって



宮崎 栄三

現代の技術文明は多くの成果を上げ、人々の生活の向上に寄与してきたことは疑う余地はない。しかし、他面において、大気汚染、河川・湖沼汚染、不要な自然破壊等々、種々の不幸な結果をもたらした。これらのいわゆる「公害」が、その後の地道な研究によって、最小限とまではいなくとも大幅に減少したことをみれば、「公害」が現代文明が生みだした必然ではなく防ぎうるものであることを示している。その防御とコントロールに大きな役割を果たしたものがセンサであろう。現在の高度技術社会においてセンサが極めて多方面において、単に防御面でなく用いられていることはもちろんである。いずれにしてもセンサは、現代文明を真の意味での正しい方向に発展させることと切っても切れない関係にある。したがって、よりすぐれたセンサの開発は、より高度な文明社会の形成に不可欠である。

かつて、硫酸の消費量が一国の化学工業の発展のバロメーターとされたように、また、近年では、石油や電力の消費量が一国の工業化の目安とされたように、来たるべき社会においては、これらに代ってセンサ技術の高さ、多様性が一国の高度文明社会の真の意味でのバロメーターになるのではないだろうか。

ふり返るに、われわれの祖先は、古池に蛙がとび込む音によって「静けさ」を表わし、風の音のかすかな違いによって季節の到来をほぼ正確に感じとってきた。このようにわれわれ日本人は外国人にないすぐれた“センサ”の持主でもある。上のバロメーターとなるセンサの中には、このような伝統的“センサ”をも決して除外してはならないはずである。

本特集号は一年以上も前から編集委員会において企画され、馬場編集副委員長を中心に小委員会が発足した。委員の方々の非常な努力により、年5回発行に移行した最初の特集号として刊行される運びとなったものである。

最後に、本特集号刊行に際し、電気化学協会センサ研究懇談会より刊行費の一部が援助されたことを付記し、感謝する次第である。

(東京工業大学理学部、本誌編集委員長)